

『融通円門章』の書誌学的研究

戸 田 孝 重

大通（二六四九—二七一六）は、元禄十六年（二七〇三）に『融通円門章』（以下『円門章』）と宝永二年（二七〇九）に『融通念仏信解章』（以下『信解章』）を著わし、融通念仏宗の教学的基礎を確立した。前者は、紙数にして僅か三五枚で、甚だ簡略なものである。融通の立場を円教とし、天台の三千互具と華嚴法界縁起の重々無尽の思想を採用してその内容としている。おもに、『華嚴法界義鏡』『華嚴經行願品疏』『華嚴經探玄記』など華嚴関係のものからの引用が目立つ。

それに対して、後者は上下二巻で、『円門章』が難解なため、諸人の懇請をいれて、和文体によって教義を平易に解説したといわれている。内容は『円門章』と共通する点が少なくない。しかし、引用については『華嚴經』『般舟三昧經』『遺教經』『宝積經』『大集月藏經』『楞嚴經』『起信論』『觀無量壽經』など二十数部の經論を引用し、融通念仏の信と行をならび勧める。その最も顕著な特徴として、知礼の『觀經疏妙宗鈔』によって、約心觀仏を説くことがあげられる。

口称ヲ縁トシテ心性ニ薰ジ、心性所具ノ極樂ノ依正、薰ニ由テ發生ス。心具シテ而モ生ズ。豈ニ心性ヲ離ンヤ。

心ヲ全フシテ是佛、佛ヲ全フシテ是心。終日心ヲ念ジ、終日佛ヲ念ズルナリ。⁽¹⁾

佛身を通して佛心を見る。その佛心は大慈悲心であり、己が心を離れないと観じるというのである。

このことを考えると、両者の関係をどのように位置づければよいのかという問題が浮かびあがってくる。そして、融通念仏信仰の原形ともいえる念仏合唱などは、どこにも触れられていない。ただ単に平易に解説したと言えるのであろうか。現存するこれらの版本を調査すると『円門章』のほうが圧倒的に多いという事実もわかってきた。このことは、ともすれば『信解章』撰述の目的とは異なるように思える。前回、融通念仏宗の成立史と、これらの大通の著作の成立過程などをあわせて考察しなければ、その教義を明確にすることは難しいと述べた。そこで最近、総本山大念佛寺に所蔵されている

資料を拝見し、基礎的研究を行うべく数名で調査を進めている。現在、宝物館収蔵庫において、目録と現物を照合した。あらためて記録をとりたいと思っている。そして、大通の残したメモ類をはじめとする多くの文書を整理しているところである。また、特に版木については課誦や縁起など種々のものがあるので適宜とりかかる計画だ。しかしながら、『円門章』の原本ならびに版木については探索したが、いまのところ発見には至っていない。

現行の『円門章』をみてみると大正藏經は大日本佛教全書などによつて校定しているが、それは縮刷大藏經の単なる誤植の問題のようである。しかし、第十章解文義において、阿弥陀仏が良忍に授けた所説（仏説）と、彼がそれを理解し会得した解釈（祖釈）を説くなかで、諸佛心内衆生。念衆生心中佛。故所念外。別無能念。衆生心内諸佛。度諸佛法中生。故能念外。更無所念。⁽²⁾

とあり、衆生の心内にある諸仏が、諸仏法身中の衆生を済度し給うというのだが、いまひとつ分かりにくい表現のように思える。また、最後に迷與不入非不思議矣⁽³⁾

とあるのは、往古より享保十七年（一七三二）に行観良山が著わした『融通円門章私記』のなかで、

不字恐衍焉。或可。偏擧失略得。以誠勸行者。章主一善巧者也。⁽⁴⁾

と指摘されている。ぜひ原本や版木を入手したいところである。このようなことから、現存する『円門章』の諸本をとりあえず書誌学的に考察してみたい。

まず形態については、版木で印刷した製版印刷と考えられ、すべて袋綴装である。縦横寸法は、二六糎×一八糎のもの、三十糎×二二糎のものが。前者は糸を通す穴が四つ目であり、後者は五つ目になっている。三五丁、行数・字数は七×一三である。

表紙は紙製で『融通円門章』と書名が題簽に記されている。色は藍色で、先の五つ目のものはやや薄い色になっている。表紙の裏にはほとんど何も書かれていない。

その次の頁に、毘沙門天の口絵がある。融通念仏宗において毘沙門天の信仰は重要な位置をしめている。この像は左手に鉾を持ち、右手を腰にあてた姿をしている。若干異なる姿のものもあると聞くが未見である。この裏に、また別の口絵がある。天牌といつて天皇を寿ぐ位牌である。わが国の前途は、かたくゆるぎなく、皇室は永く栄え、仏の光明が一層光り輝き、仏の教えが、常に人々を導かんことを。というようなことが位牌にかかれていた。

文字については、楷書体になっており、『信解章』が明朝体であるのとは異なる。詮海（一七八六—一八六〇）は、文政二年（一八二九）に文政改刻課誦をつくつてゐる。これと同じ

字体である。それとさらに一点気付いたことは、かすれた文字などがほとんどないということだ。かなり多くの部数がつくられたと思われるのに、文字のつぶれているものを見受けることがあまりない。一方、『信解章』のほうは、印刷のよくないものが多々ある。また、料紙は一般によく用いられている楮紙のようだが、五つ目のものは、紙質も厚く粗悪である。

そして版本の奥書には、

元禄十六歳次癸未王春穀旦^⑤

とある。

融通念仏宗教学研究所編『融通念仏宗年表』には、元禄一六年（一七〇三）大通上人融通門門章一卷を撰述すとあり、その根拠を『三祖略伝』（明治二十年 平岡順亮著）や『大念佛寺誌』（明治三十七年 大源山）においている。しかし、概ね学問的検証をまつために後日に託したと記されている。さらに、この『大念佛寺誌』とは総本山大念佛寺が明治三十二年五月の火災によって、大堂はじめ諸堂宇を焼失したことによって、本山の由緒来歴を宗内に正しく伝える目的のもとに編纂されたものに相異ないと考えられているものである。

宝物館収蔵庫に、『大源山衆名帳』（整理番号 一五八）がある。その中に『融通本山檀林清規並序』なるものがある。これは、先の『大念佛寺誌』や『大源雑録』（大念佛寺四六世大通の遺言を、四七世忍通が編纂したもの。明和二年写本奈良県大念

寺所蔵）にも記載されている。元禄九年（二六九六）に制定したようである。その中に、

就中融通門門章老僧自彊為初学、略顯示宗門緊要之義、学頭職者春極二必講説之、初学人日用熟讀暗誦而、其義勿迷宗意^⑥

とあり、すでにその存在が認められるとともに、暗誦することとを求められていたことがわかる。

また、

書林 芳野屋 五兵衛

和泉屋 傳左衛門^⑦

と最後にある。芳野屋五兵衛と和泉屋傳左衛門については今のところ詳しいことは不明である。

書き込みについては、ほとんど何も書かれていないが、「入衆許可」というような銘が入っていることが多い。最も古い例として、奈良市鳴川町徳融寺で所蔵するものに、

天保五甲午年

十一月六日 杏村西福寺

許入衆 弟子寶山^⑧

と書き込みのあるものがある。

そして、

小川榮玉

入衆許可ニ依リ之ヲ授與ス

昭和十年五月廿一日 印^⑨

とあるものもあり、この頃にはまだ入衆にあたり授与されていたことが伺える。ちなみに、五つ目のもののなかに、大正二年五月四日付けの入衆許可証のついている版本がある。しかし、その後に先に示したように昭和十年の銘が入ったものは四つ目になっているので、おそらく昭和初期ごろにはまだなんらかの版本が存在したであろうと推察される。

以上のことから『円門章』は、版本に元禄十六年云々という奥書があるものの、すでに元禄九年にはその存在が認められるので、成立年時については検討を要すると思われる。また今のところ、天保五年と銘の入った版本が最も古いものである。そもそも暗唱することが求められており、昭和の初めごろまで入衆許可証の役割を担っていたと考えられる。ただ、あまり読まれた形跡がないにもかかわらず、多くの註釈書が書かれたことなど不明な点も多い。宗史とあわせて更に探求したいところである。

- 1 仏教全書六四 一八 上
- 2 大正八四 五 中
- 3 同 六上
- 4 仏教全書六四 一六七 上
- 5 平岡良淳著『融通円門章論講』三五五頁
- 6 大阪市平野区 大念仏寺所蔵『大源山衆名帳』
- 7 平岡良淳氏前掲書

『融通円門章』の書誌学的研究(戸 田)

- 8 奈良市鳴川町 徳融寺所蔵
- 9 大阪府柏原市 西光寺所蔵

追記

書林の芳野屋 五兵衛と和泉屋 傳左衛門については、詳しいことは不明である。ただ坂本宗子編『享保以後 板元別書籍目録』によると、芳野屋重兵衛と芳野屋重郎兵衛(大坂高麗橋一丁目)なるものが、それぞれ宝暦七年と享保十年から宝暦二十二年のあいだ大坂で営業していたことがわかる。和泉屋については同名の屋号の板元は九軒ある。さらに、『日本出版百年史年表』によれば、明治七年の大阪府管下書林として和泉屋という屋号を有する書林を二軒見出せるが、芳野屋はない。

また、元禄九年に大通は檀林の勅許を得ているわけだから、それ以前に『円門章』は存在していなければならない。そもそも元禄十六年に著わされたとするほうが事実と矛盾しているであろう。そこで彼の略年譜をあげておくと、妙立(天台)、鉄眼、賢蔵、高泉(禅宗)、龍空(浄土)、覚彦(天台)、恵空、照周(真言)らに就いて諸家の宗要を学び、その秘奥を究めたと伝えられる。

- 天和元年(一六八二) 四五世良親に投じて剃髪、三十三歳。
- 天和二年(一六八二) 宗門復興の願意を幕府に白す。
- 貞享元年(一六八四) 再び江戸に向かい、三年の官暇を得て帰り、この年三たび江戸に上る。
- 元禄元年(一六八八) 宗門復興の台命を受ける。
- 元禄二年(一六八九) 四六世上人となる。
- 元禄四年(一六九二) 『融通念仏縁起』を出版。学頭寮を建立する。

『融通門門章』の書誌学的研究(戸田)

元禄九年(一六九六) 檀林を設置し清規を定める。

『融通本山清規並序』は十七条あり、本論に引用した部分は第三で、当時の学侶における方針を示すものである。この他に第四、九、十、十七をあけておく。

一 入我宗、徒者専学華嚴經法華經彌陀經梵網經等疏鈔、精究其義、己達之人、常講演之、開示初学、兼廣繙諸教、大多聞德、有餘力、則傍難儒典、閱神書等亦不妨矣、就中融通門門章老僧自彊為初学、略顯示宗門緊要之義、学頭職者春禪二時必講説之、初学人日用熟讀暗誦而、其義勿迷宗意、児孫若能如是、則老僧從來勤苦練行、馳走東西再興宗門之本懷亦足而已、至嘱至嘱

一 講談說法、学頭雖應其任、疲極倦之、則所化之中有器量漢、蒙学頭能化之允許助講扶演、同展化儀亦可、幼学假託餘縁、缺其講席、或又列雖聰、退不学、則匪啻空講主之勞、又戾老僧新開檀林之本志、是大不可也、可不戒諸

一 学侶不許入衆以來不經七年、傳受法脈不經十五歲稟承宗脈、但除拔萃利器與緇林鈍根、是非制限握法柄者、可不鑒諸

一 於学侶中、有宗脈既傳法器成立堪為宗門棟梁者、学頭與次座評議引詣方丈、求乞啓書、宜令參内頂戴綸旨而、進位階、若不爾学者無勇、寺主還得不知人之誚矣

一 僧伽以和合、為義心也、不得因小事爭執、若大事難忍者、亦須心平氣和以理論辦、不可辭而去動氣發飽、即非好僧也、況又徒黨惱他、惡口罵人是非互競、眼赤色變、是僧中羅刹也、立擯出之免汙法門其害不少可不惡乎、

〈キーワード〉 『融通門門章』、大通、

『融通本山檀林清規並序』

(佛教大学非常勤講師)

退会に関する内規

- (1) 会員は、学会本部に届け出た上で、いつでも退会することができる。
- (2) 会費を三年間滞納した者は、退会したものと認める。
- (3) 会の名譽を著しく害なう等、会員として不適当と認められる者については、理事会の決定により退会させることができる。
- (4) 本内規の変更は理事会の議決による。
- (5) 本内規は昭和五十四年九月十一日より実施、平成五年五月二十二日より改定施行する。

“the lesser vehicle” which the historical Śākyamuni preached in his time with “the great vehicle” which arose after the death of Śākyamuni by using the Huayan school’s hermeneutical scheme of the five kinds of teaching. In his view, both kinds of vehicles become the one practical path to becoming Buddha. From a historical point of view, Fujaku’s theory is the early modern Buddhist’s answer to the problem that the historical Buddha could not have preached the Mahāyāna sūtras.

51. A Study on Japanese Buddhism from the Radius of Buddhist Civilization

Shunji HOSAKA

52. Bibliographical Study of *Yuzu Enmonsho*

Takashige TODA

The general headquarters of the Yuzu Nembutsu sect is located in the Dainembutsu-ji temple, in Hirano ward, Osaka.

The Holy Saint Daitō (1649–1716) got official approval to re-establish this sect in 1688, the first year of the Genroku era, in the Edo period.

He achieved several things during his lifetime. For example, he published the *Yuzu Enmonsho* in 1703, the 16th year of the Genroku era, and the *Yuzu Nembutsu Shingesho* in 1705, the 2nd year of the Hoei era. The first one exists neither as an original book nor in woodblock form. The other exists only as woodblocks. However I have found the book name *Yuzu Enmonsho* in the *Danrin Shingi narabi ni Jo* of 1696, the 9th year of the Genroku era.

Bibliography has proved that the oldest written source is the printed book of the *Yuzu Enmonsho* from 1834, the 5th year of the Tempō era. It had a role regarding permission to enter the sect, as any person who wanted to enter the sect had to memorize the *Yuzu Enmonsho*.

53. Priest Jōkei and his Faith in Prince Shōtoku in Light of the Materials in